

コールド・シティ

機内上映の映画が終わると、機首に近いファーストクラスのスペースは闇に沈んだ。九千メートルの高度でこのジュラルミン製の密室を飛ばしつづける四発のジェットエンジンの音だけが轟々と闇を満たしている。

逆Vの字に並んだシートの、出口に最も近い左側の席に女はすわっていた。

ロンドンと東京を結ぶモスクワ経由便は、直行便に比べると利用率が著しく落ちる。

この便もそうだが、ファーストクラスには空席が目立ち、女の他には、反対側の前より二人の白人と、ひとつおいた前に日本人の男女が乗っているだけだ。

白人の片方がさっきまで読書灯をつけ、足もとのブリーフケースから出した書類を読みふけていたが、映画が終わったのを機会に、隣席の連れと同じようにアイマスクをかけ、シートを倒してしまった。

女は闇の中にほんのりと浮かぶジェット機の天井に目をこらしていた。

髪は肩までの長さで、色の白い整った顔には、薄い化粧が施されている。着ているのはコードエロイのパンツに、薄いなめし革で作られたジャケットだった。パンツのウエストラインは、こぶりだが形よく盛りあがった胸とは対照的に、思いきり細くくびれている。女にしてはやや濃い眉の下に、透明な印象を与える、くつきりとした二重瞼の目があった。

卵型の顔立ちの中心を通った鼻筋が走り、中央がはつきりと窪んだ美しい唇につながっていた。口もとは今、小さくひきしまり、かすかな皺がその両端に浮かんでいた。

女は静かに深く息を吸いこんだ。マニキュアを施さず、爪も短く切りそろえた指が隣の空席から、サービスマンで配られたロスマンズの手平べったい箱とマッチを取りあげた。

指先は、女にしては不自然なほど無駄な動きがなかった。左手の親指で煙草の箱の蓋を開き、右手の人さし指と親指で中の一本をつまみあげる。淡いピンクのルーージュをひいた唇にそれをさしこむと、今度は煙草の箱とともに押さえていたブックマッチのカバーを開いた。指輪は、どの指にもはめていない。

ちぎりとつたマッチの頭をこすりつける一瞬、女は目を閉じた。炎の中に浮かんだその顔は苦しげにすら見えた。目を閉じたまま、炎を煙草の先に移すという難しい動作を、女は何の苦もなくやってのけた。それから、マッチの火を消してようやく、女は目を開いた。

ぴんどのばした指にはさんだ煙草を、女はゆっくりと口に持っていた。深く吸いこんだ煙を吐きだす一瞬、女の目が細められた。

女の動作には一切の無駄がなく、轟音の中の静寂にとけこんでいた。にもかかわらず、その美2

しい面には、どこか険があった。それは顔立ちではなく、女の張りつめた心の裡からにじみでてくる険だった。

女は静かに煙草を吸いながら前のシートの背もたれを見つめていた。

わずかに顔を窓の方向に向け、目を一点にすえている。数口ほど吸った煙草を肘かけについた灰皿でひねり消すと、女は再び大きく深呼吸した。

背後の、ビジネスクラスとを隔てるカーテンがかすかに揺れた。その瞬間、女は目を閉じ、頭をシートの背もたれにもたせかけた。

人の気配が近づいた。女はぼつと目を睜いた。イギリス人のスチュワードだった。濃紺のブレザーにグレイのスラックスをはき、口ひげを生やしている。愛想のよい微笑みを浮かべながら、スチュワードは女のかたわらにしゃがんだ。低い声でいった。

「何かお飲みになりますか？ ミズ・リー」

「冷たい水をいただけける？」

女が微笑み返して流暢な英語でいうと、スチュワードは頷いて立ちあがった。

しばらくしてグラスに氷を浮かべた水を満たして戻ってきたスチュワードは、再び同じ姿勢で話しかけた。

「眠れませんか？」

スチュワードの目には、ひとり旅をファーストクラスでつづける東洋人の美しい女に対する興味の色がありありと浮かんでいた。

「そうね。旅慣れていないから緊張しているのかもしれない」

女はいったが、それは嘘だった。緊張しているのは事実だが、別の理由があったのだ。

「じゃあ、水ではなくもつとリラックスできる何か、ブレンダーでもお持ちしましょうか」

女は笑って首を振った。

「ありがとう。でも私はお酒が飲めないの」

これも嘘だった。スチュワードは、それにはだまされないうぞ、というように首を振り返し、白い歯並みを見せた。

「飲めると便利なききもあります。特にこうした旅行中は」

女は頷いてわずかに頭の位置を変え、スチュワードを見つめた。

「——ところで、あなたは日本人ではありませんね」

スチュワードはいった。

「あら、どうして？ ミスター・マクブライド」

女はスチュワードが胸につけた銅のプレートを見てとっていった。

「驚いた。こんな暗い中でも見えるんですか？」

「目が慣れていいるから、暗闇に」

「なるほど。では、ジャックと呼んで下さい。ジャック・マクブライド。この機のチーフパーサーです。」

「私の名前はもう御存知ね」

「ええ。ファーストクラスのお客様の名前はすべて覚えるのが、機内サービスの務めですから。僕があなたを日本人ではない、と思ったのには、ふたつの理由があります」

「聞かせて」

女は微笑んで、ジャックと名乗ったスチュワートのブルーの瞳を見つめた。ジャックの頬に、かすかに血がのぼった。こんなに美しい東洋人の女をファーストクラスに迎えたのは初めてだった。

「まずそのひとつ。日本人の方で、そんなに完璧な英語を喋る人に僕は会ったことがない」

ジャックの言葉は真実だった。と同時に、そういっておけば、万一、彼女が日本人であったとしても怒らせる心配がなかった。日本人は、自分の喋る英語をほめられると喜ぶ習性があることを、ジャックは仕事柄、知っていたのだ。

「あら、ありがとう。じゃあ、二番目は？」

「その前に。僕の推理は外れていない、そうでしょう」

「ええ。私は日本人ではないわ」

女は頷いた。

「多分、中国人。じゃなければ韓国人かな」

「韓国人よ」

「やっぱりだ」

ジャックは笑みを浮かべていった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。